

## お彼岸 ―自分の大きないのち―

昨年の暮れ、実家の蠟梅(ろうばい)が咲いたので切って裁縫好きなご門徒のお婆さんに差し上げようと電話するが音信不通でした。実はお婆さんは、脑梗塞をおこして入院していました。お見舞いに行きましたら面会は許されず、電話での会話が許され十五分ほど待つて話をすることが出来ました。私の声を聞くと涙声で、「こんな病気になってしまつて。おつ様(※お坊様)には心配かけるといけないから…」と。突然襲つてきた大病のわが身に狼狽(ろうばい)する姿と、私への連絡を控えていた詫びを伝える言葉でした。入院する前までは、「来年は九十二歳になる。孫娘も一年結婚し、私のすることはすべて終わった。もういつ死んでもいいです。早くぼつくりと死にたいです」と軽快な口調で語っていたことは正反対の言葉でした。

人は、実際にその死に近い病気に直面した時、その病気の重さと同じ位にいのちの重たさを実感するものです。平常は、いのちは自分に一番近い所にあることに気がつかず、また自分のいのちは軽かろう、さらには自分の思い通りになるものと錯覚していますが、現実はそのいのちが自分の眼前に顔を出してきたら、私の手の及ばない大きな存在であつたことに驚かされます。

お彼岸は、自分のいのちの大きさ、大切さ、尊さを再確認するいい機会です。与えられたいのちを自分の浅はかな考えで粗末にしないように。仏法を聞いてもその教えが身体を素通りしてしまつて、せつかく宝の山に入ったのに、虚しく帰るような、そんなことだけにはならないようにしたいものです。

(庄司暁憲)